

二〇〇四年五月九日

御霊によって祈りなさい(五)

エペソ人への手紙六章一八節～二〇節

エペソ人への手紙六章一八節には、

すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。

そのためには絶えず目をさましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。

と記されています。ここには御霊によって祈るようにとの戒めが記されています。この戒めは独立した文ではなく、中心の動詞は現在分詞で記されています。

それで、この戒めはこれに先立つ一〇節～一七節に記されている、霊的な戦いにおいて「神のすべての武器」をもって霊的に武装することについての戒めにつながっていると考えられます。これまで、そのことに注目して、

御霊によって祈りなさい。

と言われていることを、霊的な戦いの文脈の中でお話ししてきました。

エペソ人への手紙では、霊的な戦いは六章になって初めて取り上げられているのではなく、初めから取り上げられています。明確に霊的な戦いに触れているのは、これまで何度か引用しました一章二〇節、二二節です。そこには、

神は、その全能の力をキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上においてご自分の右の座に着かせて、すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世ばかりでなく、次に来る世においてもとなえられる、すべての名の上に高く置かれました。

と記されています。

ここで父なる神さまがイエス・キリストを「死者の中からよみがえらせ、天上においてご自分の右の座に着かせ」と言われているのは、詩篇一一〇篇一節に、

主は、私の主に仰せられる。

「わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまでは、わたしの右の座に着いていよ。」

と記されていることの成就です。それで、それに続いて、

すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世ばかりでなく、次に来る世においてもとなえられる、すべての名の上に高く置かれました。

と言われているときの「すべての支配、権威、権力、主権」は霊的な戦いにおいて神である主に敵対している暗やみの主権者たちです。それは六章一二節で、

私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいたるもろもろの悪霊に対するものです。

と言われている存在、すなわちサタンとその主権の下にあって主に敵対して働いている悪霊たちです。

私たちもかつては自らのうちにある罪のもたらす暗やみのために、この暗やみの主権者たちの巧妙な働きによって欺かれて歩んでおりました。二章一節、三節に、

あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、そのころは、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従つて、歩んでいました。私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあつて、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。

と記されているとおりです。

けれども、それに続く四節、六節に、

しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださいました。その大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、――

――あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。――キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。

と記されていますように、父なる神さまは私たちを御子イエス・キリストが成し遂げてくださった贖いの御業にあずかせてくださいました。その暗やみの主権の下から贖い出してくださいました。そして、イエス・キリストとともに天において座するものとしてくださいました。

*

一章二〇節、二一節に記されている、父なる神さまがイエス・キリストを「ご自身の右の座に着座させてくださった」ということは、イエス・キリストが「すべての支配、権威、権力、主権」、すなわち霊的な戦いにおいて神さまに敵対

している存在の上に高く置かれたということで終わってはいません。これに続く二二節、二三節には、

また、神は、いつさいのものをキリストの足の下に従わせ、いつさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。教会はキリストのからだであり、いつさいのものをいつさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。

と記されています。

二二節初めで、

また、神は、いつさいのものをキリストの足の下に従わせ、

と記されていることには「いつさいのものを足の下に従わせる」というテーマがあります。これは、詩篇八篇五節、六節に、

あなたは、人を、神よりいくらか劣るものとし、

これに栄光と誉れの冠をかぶらせました。

あなたの御手の多くのわざを人に治めさせ、

万物を彼の足の下に置かれました。

と記されていることを受けています。ここで、

万物を彼の足の下に置かれました。

と言われていることが、栄光をお受けになってよみがえられ、天において父なる神さまの右の座に着座されたイエス・キリストにあって成就しているのです。

詩篇八篇六節で、

あなたは、人を、神よりいくらか劣るものとし、

これに栄光と誉れの冠をかぶらせました。

あなたの御手の多くのわざを人に治めさせ、

万物を彼の足の下に置かれました。

と言われていることは、創世記一章二七節、二八節に、

神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創

造し、男と女とに彼らを創造された。神はまた、彼らを祝福し、このよう

に神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。

海の魚、空の鳥、地をはうすすべての生き物を支配せよ。」

と記されていることを受けています。天地創造の初めに、神さまは人を神のかたちにお造りになって、これを祝福し、ご自身がお造りになったすべてのものを治めるといふ使命をお与えになりました。詩篇八篇は、それが、人類が罪に

よって墮落したことによって取り消されたのではなく、その後も継続していることを示しています。

ただ、そのすべてのものを治めるといふ使命は、神のかたちに造られている人間が神のかたちとしての特性を發揮して、造り主である神さまの愛といつくしみを表わすことによつて果たされるものです。それで、神さまに対して罪を犯して御前に墮落してしまつた人間は、すべてのものを治めるといふことを、罪が生み出す自己中心性によつて歪めてしまつています。神さまから委ねられているものたちを押さえつけたり、搾取してしまふようになりました。それで、神さまが委ねてくださった使命を、神さまのみこころに従つて果たすことができないうものとなつてしまいました。

この使命が果たされるためには、神さま対して罪を犯して御前に墮落してしまつている人の罪が贖われ、神のかたちとしての聖さと栄光が回復されなければなりません。イエス・キリストはこのために人の性質を取つて来てくださいました。イエス・キリストは十字架にかかつて死んでくださった。栄光をお受けになつて死者の中からよみがえってくださいました。それは、私たちの罪を贖つてくださるためだけでなく、私たちのうちに神のかたちの聖さと栄光を回復してくださるためでした。そればかりでなく、栄光をお受けになつて、天において父なる神さまの右の座に着座されたことによつて、天地創造の初めに神さまが神のかたちにお造りになつた人に委ねてくださった使命を実行に移しておられるのです。そのことが、エペソ人への手紙一章二二節前半で、

また、神は、いつさいのものをキリストの足の下に従わせ、
と言われています。

*

この二二節には、

また、神は、いつさいのものをキリストの足の下に従わせ、いつさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。

と記されています。ここでは、イエス・キリストが「いつさいのものの上に立つかしら」であると言われています。そして、このことは、一章八節―一〇節で、

神はこの恵みを私たちの上にあふれさせ、あらゆる知恵と思慮深さをもつて、みこころの奥義を私たちに知らせてくださいました。それは、神が御子においてあらかじめお立てになつたご計画によることであつて、時がつ

いに満ちて、この時のためのみこころが実行に移され、天にあるものも地にあるものも、いつさいのものが、キリストにあって一つに集められることなのです。

と書かれていることとつながっています。というのは、二二節に記されている
また、神は、いつさいのものをキリストの足の下に従わせ、いつさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。

ということは、三節―一四節に記されていることに基づくパウロの祈りの中に出てくることだからです。

一〇節で、

天にあるものも地にあるものも、いつさいのものが、キリストにあって一つに集められること

と書かれていることについては、いろいろな見方がなされています。それをまとめておきましょう。

ここで「天にあるものも地にあるものも、いつさいのもの」と言われているのは人間の世界のことだという見方があります。しかし、これは人間の世界だけのことではなく、私たちのことばで言いますと、宇宙大の視野から見たときの「いつさいのもの」、神さまがお造りになったこの世界の「いつさいのもの」のことです。

また「一つに集められる」ということばは、新改訳では受動態で訳されていますが、これは（中態で）父なる神さまが御子イエス・キリストにあって「天にあるものも地にあるものも、いつさいのもの」を一つに集めてくださることを示していると考えられます。「とはいえ、新改訳のように理解しても、言われていることは同じです。それで、このお話では、新改訳の訳文をそのまま用います。」

さらに、ここで用いられている「一つに集める」ということば（アナケファライオオー）は、イエス・キリストがいつさいのもののかしらであるという意味合いを伝えているという見方と、そのようなことは表わしてはいないという主張があります。どうやら、そのようなことを表わしてはいないという主張が広く受け入れられているようです。「それはこのことば（アナケファライオオー）の中心にあるのは「かしら」を表わすことば（ケファレー）ではなく、「主要なこと」、「要点」などを表わすことば（ケファライオン）であるということによっています。とはいえ、「かしら」を表わすことば（ケファレー）と、

「主要なこと」、「要点」などを表わすことば（ケファライオン）は、互いに関連のあることばです。」

確かに、この「一つの集める」ということば（アナケファライオオー）だけを根拠として、イエス・キリストが「天にあるものも地にあるものも、いっさいのもの」のかしらであると言うことはできないと思われます。けれども、ここでは、父なる神さまが「天にあるものも地にあるものも、いっさいのもの」を「キリストにあつて」またキリストを中心として集められるということを示されています。そして、これは二二節でイエス・キリストが「いっさいのものの上に立つかしら」であると言われていることと深くつながっています。それで、この二二節との関連で考えますと、父なる神さまが「天にあるものも地にあるものも、いっさいのもの」を「キリストにあつて」またキリストを中心として一つに集められるということは、キリストをかしらとして集められるということであると言えます。

*

一〇節後半で、

天にあるものも地にあるものも、いっさいのものが、キリストにあつて一つに集められること

と言われていることは、それに先立つ八節～一〇節前半で、

神はこの恵みを私たちの上にあふれさせ、あらゆる知恵と思慮深さをもつて、みこころの奥義を私たちに知らせてくださいました。それは、神が御子においてあらかじめお立てになつたご計画によることであつて、時がついに満ちて、この時のためのみこころが実行に移され、

と言われていることから分かりますように、父なる神さまのみこころの奥義でした。そして、これは、イエス・キリストの十字架の死と死者の中からのよみがえりによって成し遂げられた贖いの御業に基づいて、父なる神さまがイエス・キリストにあつて実現してくださっていることです。これがイエス・キリストが成し遂げられた贖いの御業に基づいてなされることであるということは、さらにこれに先立つ七節で、

私たちは、この御子のうちにあつて、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。これは神の豊かな恵みによることです。

と言われていることから分かります。また、コロサイ人への手紙一章一九節、二〇節には、

なぜなら、神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、ご自分と和解させてくださったからです。地にあるものも天にあるものも、ただ御子によって和解させてくださったのです。

と記されていて、同じことが御子イエス・キリストにある父なる神さまとの和解とされています。

ですから、エペソ人への手紙一章一〇節で、

天にあるものも地にあるものも、いっさいのものが、キリストにあつて一つに集められること

と書かれていることは、それまで分裂していたもの、対立していたもの、混乱していたもの、神さまのみこころから逸れてしまっていたものが、キリストにあつて一つに集められること」です。

しかし、ここで言われている「いっさいのもの」は、初めから神さまの御前で、分裂し、対立し、混乱していたわけではありません。天地創造の御業の最後の状態を記している創世記一章三一節には、

そのようにして神はお造りになつたすべてのものをご覧になつた。見よ。それは非常によかつた。

と記されています。いっさいのものを視野に収めておられ、すべてのことを見通しておられる造り主である神さまの御前に、また、神さまがご覧になつても、すべてのものは「非常によかつた」のです。それは、「いっさいのもの」が造り主である神さまのみこころになつていて、まつたき調和のうちに、神さまの御前に存在していたということを意味しています。

このような神さまの御手の作品としてのこの世界に分裂と対立と混乱が生じたのは、神のかたちに造られて、造り主である神さまから「いっさいのもの」を治める使命を委ねられた人間が、神さまに対して罪を犯して、御前に墮落してしまつたからに他なりません。そのことは、創世記三章一七節に記されている、

あなたが、妻の声に聞き従い、

食べてはならないと

わたしが命じておいた木から食べたので、

土地は、あなたのゆえにのろわれてしまつた。

という、最初の人アダムに対する神である主のさばきのことばに示されています

す。

*

このことを受けて、ローマ人への手紙八章一九節～二一節には、被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現われを待ち望んでいるのです。それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。と記されています。

神のかたちに造られて、造り主である神さまから「いつさいのもの」を治める使命を委ねられた人間が、神さまに対して罪を犯して、御前に墮落してしまつたために、神さまがお造りになつたこの世界の「いつさいのもの」が「虚無」(マタイオテース)に服するようになりました。これは、神さまがこの世界の「いつさいのもの」を無意味なものではなく、ご自身のご栄光の目的にそつた意味あるものにお造りになつたということを踏まえています。それが、神さまに対して罪を犯して、御前に墮落してしまつた人間との結びつきによって、本来の意味を失つてしまつているということを意味しています。

そうであれば、御子イエス・キリストの十字架の死と死者の中からのよみがえりにあずかつて罪を贖われ、神のかたちの聖さと栄光に回復されている「神の子どもたち」が現われることによつて、この世界の「いつさいのもの」は、「滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられる」のです。それで、

被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現われを待ち望んでいるのです。と言われています。

このことは、エペソ人への手紙一章一〇節で、

天にあるものも地にあるものも、いつさいのものが、キリストにあつて一つに集められること

と言われている父なる神さまのみこころの奥義が実現することには順序があるということを示しています。

まず、神のかたちに造られて、造り主である神さまから「いつさいのもの」を治める使命を委ねられているのに、神さまに対して罪を犯して、御前に墮落してしまつた人間が、御子イエス・キリストの十字架の死と死者の中からのよみがえりにあずかつて罪を贖われ、神のかたちの聖さと栄光に回復されること

から始まります。そして、「いつさいのもの」が神の子どもたちの栄光にあずかって、「滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられ」るようになります。

そのことはイエス・キリストにあつて、すでに始まっています。それがエペソ人への手紙一章二〇節〜二三節に、

神は、その全能の力をキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上においてご自分の右の座に着かせて、すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世ばかりでなく、次に来る世においてもとなえられる、すべての名の上に高く置かれました。また、神は、いつさいのものをキリストの足の下に従わせ、いつさいのものの上に立つからであるキリストを、教会にお与えになりました。教会はキリストのからだであり、いつさいのものをいつさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。

と記されています。

*

神のかたちに造られて、造り主である神さまから「いつさいのもの」を治める使命を委ねられた人間が、神さまに対して罪を犯して、御前に墮落してしまったのは、暗やみの主権者であるサタンの誘惑に乗ってしまったからです。サタンは神のかたちに造られている人間を初めとして、神さまがお造りになった「いつさいのもの」を、神さまの御前において分裂し、対立し、混乱するよう導いて、神さまの創造の御業が空しいものとなってしまうことを狙っていたわけです。それが今も霊的な戦いの争点となっています。

このようなことを視野に入れて見ますと、一章二〇節、二一節に、

神は、その全能の力をキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上においてご自分の右の座に着かせて、すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世ばかりでなく、次に来る世においてもとなえられる、すべての名の上に高く置かれました。

と記されていることは、霊的な戦いにおいて「女の子孫」としてこられた贖い主であるイエス・キリストが勝利したことを記していますが、そして、それは霊的な戦いにおいて決定的に大切な出来事ですが、それですべてではないことが分かります。そこには、神の子どもたちの回復と、造られた「いつさいのもの」の回復がどうなっているのかという問題が残っています。そしてそれに

いて、二二節、二三節で、

また、神は、いつさいのものをキリストの足の下に従わせ、いつさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。教会はキリストのからだであり、いつさいのものをいつさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。

と書かれているのです。

イエス・キリストは人の性質を取って来られて、十字架の死に至るまでも父なる神さまのみこころに従いとおされ、栄光をお受けになって、父なる神さまの右の座に着座されました。このことは、

神は、いつさいのものをキリストの足の下に従わせ、

と書かれていますように、天地創造の初めに神のかたちに造られている人間に委ねられた「いつさいのもの」を治める使命を成就することであると書かれています。そして、父なる神さまは、

いつさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。

と書かれています。それで、これに続いて、

教会はキリストのからだであり、いつさいのものをいつさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。

と書かれていますように、教会は「いつさいのものの上に立つかしらであるキリスト」のからだなのです。

これは、一章一〇節で、

天にあるものも地にあるものも、いつさいのものが、キリストにあつて一つに集められること

と言われている父なる神さまのみこころの奥義が、「いつさいのものの上に立つかしらであるキリスト」のからだである教会を中心として、また教会から実現していくことを意味しています。

エペソ人への手紙は大きく前半の教理篇とそれを踏まえた実践篇に分かれます。実践篇は四章から始まりますが、その最初である一節〜六節には、

さて、主の囚人である私はあなたがたに勧めます。召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。からだは一つ、御霊は一つです。あなたがたが召された

とき、召しのもたらした望みが一つであったのと同じです。主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。すべてのものの上であり、すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられる、すべてのものの父なる神は一つです。

と記されています。ここでは、私たちは「御霊の一致」を保つために召されていることが示されています。

このことを、これまでお話ししてきたこととのかかわりで見えますと、私たちがこのような「御霊の一致」を保つことは、

天にあるものも地にあるものも、いっさいのものが、キリストにあつて一つに集められること

という父なる神さまのみこころの奥義が実現することの中心であり、第一歩であるのです。

私たちがこのような「御霊の一致」を保つことは、今ここで私たちがともに集って信仰の家族の交わりを保ち、一人の主イエス・キリストの御名によって、唯一の神さまとともに礼拝することに現われてきています。しかし、この「御霊の一致」はそれだけで終わりません。六章一八節で、

すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。

そのためには絶えず目をさましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。

と言われていますように、「絶えず目をさましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし」て祈り合うことによって、「御霊の一致」は「すべての聖徒たち」の間にとり広がりをもって実現していくのです。